

---

## 永昌社蔵呉春景文像と円山四条派

### —明治京都画壇の再検討—

---

本発表は、明治期に制作された呉春（1752-1811）と松村景文（1779-1843）の肖像画の対幅について考察を行うとともに、円山四条派の動向を軸に明治期の京都画壇について再検討を試みるものである。

ここで扱う呉春像、松村景文像の対幅は「永昌社蔵」と記された箱に収められているもので、四条派の画家である前川文嶺（1837-1917）の旧蔵品でその遺族に伝えられた。作者も四条派の画家で、呉春像が森川曾文（1847-1902）、景文像が国分文友（1823-1900）の手になる。呉春像、景文像の作例は19世紀を通じて数点ずつ確認されるが、本作を含め近似した姿で描かれているものが多く、四条派の画祖として固定化した図像を有するに至っていたことが想定される。これら肖像画の諸作例は、円山四条派という画派の特質を考察する上で示唆に富むが、とりわけ本作に関しては二点の特徴が挙げられる。すなわち、当初から呉春・景文兄弟が対幅一具として描かれている点であり、蕪村以下五代にわたる四条派画家歴代の肖像画群の一部として伝来している点である。

このように、四条派の画祖の肖像画の作例としても興味深い本作であるが、想定される制作背景は、近世から近代への転換期にあった明治期の京都画壇を考察する上で不可欠な視点を提示する。永昌社とは、蕪村による芭蕉顕彰の舞台として名高く、蕪村・呉春・景文の墓所である洛北の寺院、金福寺を維持する目的で結成された団体であり、曾文・文友・文嶺らこそがその発起人であった。永昌社の結成は明治25年（1892）のことであるが、実のところ呉春と景文はその3年前、明治22年に金福寺に改葬されたばかりであり、これを主導したのが曾文・文友らである。すなわち、呉春・景文が明治20年代に顕彰されるなかで、これを主導した画家によって制作され伝えられたのが本作なのである。

近代京都画壇が円山四条派を基盤として展開したことに関しては、様々な視座から研究が蓄積されてきた。本作は、京都画壇が展開した画祖顕彰の動向を背景に制作されたのであり、近代化の過程において円山四条派が画派としてどのような状況にあったか、具体的な姿を提示する点で興味深い作例と言えよう。本発表では、こうした関心から、明治20年代の円山四条派の諸相、すなわち、旧来とは別種の表現の胎動、新たな価値観の形成、世代交代の漸進などに論を進める。

上記のように、本発表では江戸時代末から明治時代における円山四条派の特質を考察するとともに、この画派が社会的重要性を保持していた明治半ばにおいて展開した、絵画をめぐる近代化の諸相を論じ、京都画壇が迎えていた構造的変革について再検討を試みる。